女性のふるさと心理（2）

武　田　圭　太

問　題

人の生涯を包括的にとらえようと、年齢を目安にいくつかの時期に区分して、各時期に特有の心理的・社会的状態を記述し、その状態を向上させ成長させるために達成することが望ましいとされる諸課題を示した段階（stage）を設定し、それらを加齢にそって連鎖させた全体を発達の観点から考えることを一つの主題とするのが生涯発達心理学である。それぞれの発達段階で解決していかなければならない課題には、①自分らしさを求めながらどういう人生を生きていきたいのかを模索する自己の側面と、②重要な他者との関係性をはじめ、社会的なつながりを形成し、そこに自己を位置づけるという側面がある。

バルテス（Baltes, Reese, & Nesselroade, 1977; Baltes, Reese, & Lipsitt, 1980）は、人の誕生（受精）から死までの過程にみられる個人内の変化、安定性、連続性と、その個人間の類似性、異質性を記述し説明することを生涯発達心理学の主題とした。バルテスによると、人の生涯にわたるパーソナリティ形成は、①加齢による標準的な身体の成熟と老化、②就職、結婚や出産、転居など、生活上の出来事、③歴史上そのときどきの時代背景に影響される。

エリクソン（Erikson, 1963, 1980）も同様に、人の発達を青年期までに限らず生涯に発展させ、その全体を八つの段階に区分し論議した。エリクソンの考え方は、生物学の漸成説（epigenesis）にもとづいたパーソナリティの後成説である。エリクソンによると、人のパーソナリティの成長は、全体の計画から各部分が漸次発生し、それぞれの部分には特別に優勢になるときがあり、やがてすべての部分が機能する全体をかたちづくるようになるという。また、パーソナリティの各構成項目は他のすべての構成項目と系統的に相互関連し、それらは各項目の固有の順序にしたがい固有の発達によって決まる。さらに、各項目は、その項目自体の決定的で危機的なときが、正常な発達をたどって到来する以前から、何らかのかたちで存在していると、エリクソンは考えた。

人の生涯にわたるパーソナリティ形成を、全体を仮定した各部分の漸次分化と最終統合とみなす生涯発達心理学では、年齢で区分された個別段階の発達状況だけでなく、過去と現在と未来とが積み重なってつながった全体を理解することを重視する。特に、幼少期や学童期は、パーソナリティの形成に影響する多感な時期とされ、このときの原体験が青年期以降の態度や行動の基礎と考えられる。幼少期や学童期をすごしたふるさとの生活環境は、人の個性が育まれていく始原（武田，2018）であり、生涯発達の軌跡を時間と空間を機軸に描く際の原点と考えられるかもしれ

ない（武田 , 1993, 2016b）。

加齢が進み高齢期から老年期に差し掛かる頃、残り少なくなった余生を実感しつつ来し方行く末を想うとき、幼少期や学童期をすごしたふるさとの生活環境にまつわる記憶が蘇るだろう（武田 , 2008）。一般に、ふるさとは、顔見知りがたくさんいて安心でき、ゆっくりすごせるところだろう。住み慣れた土地だから気持ちが落ち着くかもしれない。多くの人は、子どもの頃の友人や隣近所の人たちとの懐かしい思い出があるふるさとへの愛着を感じている（武田 , 2008）。

しかし、男性と違い女性の場合、夫の実家やその近隣で長く生活するうちに、自分自身のふるさととは別に第二のふるさとを感じるようになるかもしれない（武田 , 2018）。また、現住地が子どもにとってのふるさとであったり、所有する住宅の所在地を生活拠点と感じたりすることもあって、女性のふるさと心理の構造は男性とは異なると推察される（武田 , 2016a, 2017）。

安井（2000）は、従来、旅や家出など、非日常の経験から論議されることが多かった女性にとってのふるさとについて、里帰り慣行を手がかりに日常の慣習としてとらえようとした。安井は、石川県鳳至郡門前町で行った現地調査の結果から、嫁入り婚を想定すると、女性は結婚して生家から婚家へ帰属する集団を変えることによって、彼女にとってのふるさとが出現するとした。結婚は、女性にとってふるさと出現の契機となる。また、八木（1996）は、質問紙調査の結果にもとづいて、女性にとってのふるさとの心象が、娘時代、妻時代、母時代、祖母時代など、加齢にともなう世代交代の時期に対応し変化しているのではないかと示唆した。

このように、民俗学では女性にとってのふるさとをめぐる議論が先行していくつかみられるが、生涯発達心理学の観点から、女性にとってのふるさとを検討した報告は皆無である。そこで本稿では、人の生涯発達の始原としてふるさとを仮定し、成人女性のふるさと心理をとおして、幼少期や学童期と高・老年期とはどのように関係するかについて考えてみたい。

方　法

調査対象　二人の女性が原調査の対象だった。一人は、愛知県豊川市北部のｇ町で生まれ、結婚後はｇ町に隣接する岡崎市東部の山中の集落で林業を営みながら生活してきたＤである。もう一人は、名古屋市で生まれ育ち、結婚後は大阪で暮らしていたが、次男の病気治療のために愛知県の奥三河に移住したＥである。

Ｄへの調査は今回が初めてだったが、Ｅについては、2009（平成 21）年６月、山中の過疎集落に移住した動機や移住するまでの経緯などを中心に、Ｅとその家族が移住経験をどのように認知しているかを聴いた（武田 , 2015, 2016）。

調査方法　原調査は、ふるさとに関する心理について、できるかぎり自由に回答してもらおうと原則として構造化されていない面接法を用いた。この方法によると、回答者は発言の長さとその内容に関して完全に自身で統制できる。Ｄへの面接時間は約１時間だった。Ｅについては、諸般の事情から文書で質問を伝え文書で回答してもらった後、その記述内容の細部をやはり文書で確認してまとめた。

あらかじめ用意した面接項目は、次の６項目だった。

①あなたは、ふるさとを思うことがありますか。そのふるさとは、あなた自身のふるさとですか、それとも、現住地ないし夫のふるさとですか。それはどのような思いですか。

②あなたにとって、ふるさとはどのようなものですか。

③「私にはふるさとがある」や「私にはふるさとがない」という意見から、どのようなことを考えますか。
④現在のあなたの生活に、あなたのふるさとはどのようにかかわっていますか。
⑤あなたにとって、夫のふるさとはどのようなものですか。
⑥あなたは、夫のふるさととどのようにかかわっていますか。

これらの面接項目を端緒に、調査対象者が認知するふるさと心象を詳細に口述してもらうように、調査者はD、Eの個別事情にそって質疑応答の文脈と論点を整えながら関連する質問をした。

調査時期　原調査は、Dに対しては2018（平成30）年7月、Eについては同年10月に行った。

分析手続　D、Eに対して6項目の共通質問をしたが、二人のふるさとにまつわる背景や現在の生活状況は異なるため、面接項目別に発言内容をまとめるのではなく、一人ひとりの個別事例として記述し考察する。

結果：事例D

1. 夫のふるさとに定住するまで

Dは愛知県東三河で生まれ育ち、調査を行ったとき87歳だった。19歳で結婚し、東三河の山中の夫のふるさとに嫁いできた。「（結婚すれば）お米が食べられるから」。

「百姓のことは何も知らなかった。植え込み、下刈り、山仕事など、何でもした。隣近所の人たちは皆親切に手伝ってくれた。（嫁いで）一年間くらいで百姓の仕事を覚えた」。

「（Dが生まれ育った）hがふるさと。ふるさとは戦時中で、苦しかったことばかりで、幸せだったことはない。今は幸せ、何でも乗り越えられる自信がある」。

夫のふるさとでの家族関係で、Dは困難な時期があったという。

「夫の妹が出戻ってきて（彼女との）関係が難しかった。その後、夫の妹は結婚詐欺にかかって自殺してしまった」。

現在、Dは嫁ぎ先の夫の実家で息子夫婦と暮らしている。息子の嫁Fは1972（昭和47）年に鹿児島で生まれ、集団就職で愛知県に出てきてガソリンスタンドで働いていたとき、Dの息子と知り合い結婚して同居している。Fは椎茸を栽培している。

Fにとってのふるさとは、幼い頃の思い出そのものであるという。Fは中学生のときに父親を亡くし、「覚悟して集団就職で（ふるさとを離れ）出てきた。今は住みやすい」。

「ふるさとを思い浮かべるときは、ふるさとに誰がいるかが鍵である。血のつながりを（ふるさとに）感じる。ふるさとに行かなきゃならないという気持ちになる」。

2. 夫のふるさとでの暮らし

DとFは築100年くらいの家屋に住んでいる。山中の林業の集落で、個人所有の山が20町歩くらいある。林業が盛んな頃は、「山で食べていく」ところだった。

Dは、子育てを小姑に任せて「山仕事をしなければならなかった」。夫の父親は村長を務めていて、山中なのに本を読むような文人だったが、猟師でもあった。今はもう猟師はいなくなってしまった。

1972（昭和47）年以前は、自宅で頻繁に宴会を開いていた。夫の父親は稲刈りの途中でも山へ猟に出ていた。夫の父親たちが狩りをしているあいだ、Dは農作業をしなければならず大変だったという。何度か自身のふるさとhに帰りたいと思ったが、在所のお婆さんが、「一度嫁いだら二度と（実家の）敷居を跨ぐなという厳しい人だったので帰れなかった。よく我慢したと思う」。

里帰りは安息の時間であり、生家は休息の場所であったと考えられ（安井, 2000）、Dのふるさとhは婚家から適度に離れた位置

関係だった。

Fが嫁いだ頃、集落には47軒の人たちが住んでいたが、今は27軒、60人くらいになった。小学生の子どもがいるのは1軒だけである。

一年をとおしてこの集落では、大きな祭りの他に3ヵ月に一回ほど小さな祭りがある。以前は祭りに備えて前月から餅つきをしていた。皆で餅を丸めて袋に入れホチキスでとめた。

「今はお金さえ出せば何でも手に入る。3～4年くらい前から、葬式も斎場でやるようになったし、寺も空き家で和尚はいない」。Fが嫁いできた頃のi小学校は、その後、j小学校になって、それも後2～3年で廃校になるかもしれないという。Fの息子二人はk市内（人口386,943人の西三河地方の中心都市）、娘は岐阜に住んでいる。

3. 毎日の楽しみ

Dは山仕事を続けた後、57歳のとき、全寮制中学校で約500人の生徒の給食づくりのおばさんとして働き始めた。毎日、カブに乗って通勤した。「今でもカブに乗りたいけど、もう歳なので（事故を起こさないように）乗らないことにしている」。給食のおばさんを辞めた後は養護施設の仕事をした。

最近、荷物を梱包する際の不要となったテープで、小学生が茶摘みをするときに使う籠を編んであげたら、他の子も欲しいというので作ってあげたところ好評だった。「一日に2個編んで、欲しいという人にタダであげている。タダでもらった梱包テープを独流で編んだ籠をあげて、仲間が増えていくのがうれしい。“籠のおばさん”と呼ばれている」。

その他の楽しみは、友だちが誘ってくれて街の映画館に映画を観に行くことである。「映画館の雰囲気がいいし、映画を観た後、美味しい食事を食べるのも楽しみ」だという。

結果：事例E

1. l町に移住後の暮らし

Eが高槻市からl町に移住したのは、1994（平成6）年4月、35歳のときである。

「l町に移住して25年目を迎え、人生のなかで一番長く住んでいるところとなった。最初のうちは、欲しいものも買えなかったり（町内の店は、品揃えが少ない）、物価も高かったりで、車がないと（近くのスーパーマーケットで安く買い物して）生活できないのはとても不便だった」。当時、Eはペーパー・ドライバーだった。また、「電車は1時間に1本で、停車する駅の多さには閉口した。大阪では、同じ距離を快速電車で半分の時間で行ける」（武田, 2015, p.214）と、買い物や通学の不便な移動に困惑していた。しかし、インターネットを利用したり、思いがけずコンビニエンス・ストアが開店したりして、車や電車で移動しなくても、欲しいものを手に入れられる生活が山中でもできるようになってきた。

「毎週末には、家族でm市やk市へ買い出しに行って都会の生活を懐かしんでいたが、今では、1ヵ月以上、m市にさえ行かなくても平気になった。ネット・ショッピングが普及し、わざわざ街に行かなくても欲しいものが翌日届くのはとても便利で助かっている」。

「移住当時は5,000人いたl町民が今は3,000人ほどになってしまい、スーパーや個人商店も閉店が続くなか、コンビニができたのは驚きだった。24時間営業で、牛乳などを買い忘れても夜中に買いに行くことできるのは助かっている」。

l町の人口は依然として減少しているが、温泉施設の建設や特色ある催し物の開催などで交流人口を確保しようとしている。

「温泉ができて観光客が増えたり、チェンソー・アート、音楽祭などのイベントも開催されたりするなど、近隣町村からもうらやましがられる活気のあるl町となっている。実

際、若い人たちの移住が多い、全国的にも珍しい地域みたいである」。

「我が家も長男がＵターンしたし、昨年(2017年)、関東から二十代の男性が移住してきて主人の仕事を手伝ってくれて、頼もしい限りである。彼が移住するにあたっては、移住の先輩としてできる限りの助言や協力をした。l町の良いところ、悪いところなどいろいろあるが、私たちがこれまで暮らせているのは、(l町が）住んで気持ちのいいところなのだと思う。おいしい水と空気はもちろん、人間関係も良好ということだと思う」。

2. l町に移住する前の期待や計画の実現状況

Ｅがl町に移住した動機は、当時２歳だった次男の病気を治すことだった。

「以前、お話ししたように、l町に来たのは次男のアトピーを治すことが目的だった。次男のアトピーは、見事に治ったので、当初の目的は達成された」。

また、25年前、l町が若者定住促進住宅を建設し、入居者を募集していたことにも魅かれたようである。100坪の土地に新築一戸建てが、毎月の家賃を20年支払えば所有できるという条件だった。

「空き家があっても都会の者には貸せないとか、住宅確保は移住者にとっての第一関門である。それなのに、町がＩターン者に住宅を用意してくれるなんて、田舎の人は閉鎖的と言うけど、町をあげて歓迎してくれる、きっと都会の人にも優しい、開けた町なんだと期待に胸膨らませ、意気揚々と応募した。そして、見事当選し、晴れてl町民となった。現地を見学して、わずか２ヵ月で移住が決まった」（武田 , 2015, p.213）。

「入居した町営住宅は、契約どおり20年で譲渡され（譲渡の際にちょっと手続き上いろいろあったが）、持ち家を持つことができた」。

3. ふるさとについての思い

「ふるさととは、自分の生まれたところ、あるいは幼少期をすごしたところと思っている。私の場合は、名古屋市瑞穂区であり住宅街である。11歳で大阪に転居した後も、５年ごとぐらいに生まれ育った家が懐かしくて見に行った。最後は20年ぐらい前であるが、そのとき更地になって家がなくなっていたのは、寂しかった」。

「第二のふるさととして考えられるのは、大阪から戻った後に両親が住んでいた家である。その家には、（Ｅの）子どもが小さいときは学校が休みのたびに帰っていた。いわゆる、実家である。子どもたちにとっても、名古屋のおじいちゃん、おばあちゃんの家として、ふるさとかもしれない。両親が他界してその家も売却したため、帰る家がなくなってしまい、私の居場所はl町しかなくなってしまった。ちょっと寂しい」。

「ふるさとについて、家族のなかで特に話題にしたことはない。家を譲渡されたときに、誰の名義にするかを子どもたちに相談し、将来、誰がこの家に住むのかについてはちょっと話題になった」。

「子どもたちは、l町をふるさとと思っているのだろうか。次男は２歳でl町に来ているので、たぶん、l町がふるさとだろう。上の二人（移住当時、長女は10歳、長男は５歳）は、大阪がふるさとと思っているかもしれない」。

Ｅにとっては、「小さいときの思い出が詰まった場所がふるさとではないかと思う。帰る場所という意味では、今はl町しかないから必然的にここになってしまう。でも、なんか自分のなかでは違うような…。たぶん、これからもずっとl町にいると思うのだが。

田舎だからふるさとではなく、都会でも思い出の場所がふるさとだと思う」。

2009（平成21）年に聴いたとき、Ｅは、「最近、どうしてl町に来たのだろうと不思議に思うことがある。縁もゆかりもない土地にい

きなり来たわけで、どこかで何かがつながっているのかなと運命的なものも感じる。私はl町に来て、後悔していない。むしろ、こんなに私の人生を面白くしてくれたことに感謝している。いろんな条件やタイミングもあったのだろうが、この町に住めてよかったと思う」と語った（武田 , 2015, p.221）。l町に移住して約15年経った50歳くらいのとき、Eは、移住したことと移住地での暮らしを受容している心理状態を言い表した。そして、それから約10年経ち60歳近くになったEは、l町の遥か向こうに、今はなくなってしまったが、名古屋市瑞穂区にあって11歳まですごした家での記憶を思い描き手繰り寄せているのだろう。

考　察

生涯の八番目の発達段階について、エリクソン（Erikson, 1963, 1980）は、誠実で、正直で、高潔な精神状態であるように人生を統合し受容することを発達課題としている。幼少期から学童期にかけて、ふるさとですごした時間がパーソナリティの基礎をかたちづくり、青年期以降の環境との相互作用をとおして多くの経験を積み重ねながら高・老年期に到達して、生涯全体を統合し受容することで人は自己を肯定できる。

D、Eは、いずれも自分自身の人生を受け容れ満足していることは、聴き取り調査の結果から明らかである。Dは、今の生活、つまり、夫のふるさとでの生活を生家での生活と比べ、前者を肯定し受容しているが、それは生家での生活への嫌悪、非難、絶望などの否定的な情動によるというよりは、バルテス（Baltes, Reese, & Nesselroade, 1977; Baltes, Reese, & Lipsitt, 1980）が示唆したように、戦時中の社会情勢下の苦難や辛苦の記憶がふるさとへの否定的な感情を喚起させるためと考えられる。辛い十代の経験を克服し、87歳になったDは、どんな困難にも立ち向かい克服できるという自信に満ちた自己を統合しているように見受けられた。Dは、エリクソン（Erikson, 1963, 1980）の八番目の発達課題を達成した精神状態にあるといえよう。

Eは、子どもの病気治療のため都会を離れ山中の過疎集落に移住するという中年期の危機を乗り越え、高・老年期を迎える頃に一定の達成感を感じている。Eは移住地をふるさとと認識しているとは必ずしもいえないのかもしれないが、母親として、子どもにとっては移住地がふるさとであるのだろうと推察している。Eは、自身の生涯を統合する発達段階に参入する時期にさしかかって、子どもにとってのふるさとという母親の視角を織り込んで自己をとりまとめようとしているのだろう。E自身にとってのふるさととは別に、子どもにとってのふるさとが、生涯を統合し受容するというEにとっての発達課題の一部になっていくのだろう。

ふるさとで戦争中に十代をすごしたDが、幼少期から学童期を今と比べて相対的に幸せではなかったと振り返るのに対して、EとFは幼い頃の思い出、つまり、記憶のなかにふるさとが肯定的に保持されている。EとFは、ふるさとの記憶心象のなかに家族や親族など、血縁関係者を想起し、彼らとすごした時間や空間を懐古している。ふるさとの記憶心象は、ふるさとにまつわる「頭のなかの絵」「頭のなかの録音記憶」などとして経験される表象と考えられる（Santrock, 1985）。Fが「ふるさとに誰がいるかが鍵である。血のつながりを（ふるさとに）感じる。ふるさとに行かなきゃならないという気持ちになる」と語ったように、人の生涯発達の始原と仮定したふるさとは、血縁を誘因として出郷者を引き戻しつなぎとめる力をもつと思われる。

また、今では生家より婚家のほうが居心地良さそうにみえるDについては、婚家で慣れない百姓仕事に従事してきたキャリアを拠

り所とする自己の成熟が感じられる。婚家で辛い思いをしたときも、Dはふるさとの家族から里帰りを許されなかったようで、そうした状況がDの忍耐力と寛容さを育んだのかもしれない。Dの語り口調から、高いストレス状態に置かれても何とか対処しようと前向きに取り組む意志が感じられた。ふるさとに一時的に避難したい思いを抑制して、Dが婚家で百姓仕事に従事し続けることができたのは、帰る場所がないという状況に適応しようと努めたからだろう。ふるさとから離れていることは、異郷の地で自己を成長させる要因になり得るかもしれない。

ともあれ、結婚して生家を離れ生活してきたD､E､Fにとってのふるさとは､生まれ育ったところである。先行して行った聴き取り調査でも、既婚女性は、婚家ではなく生家があるところをふるさとと認知していた（武田，2018）。しかし、Eの語りにみられるように、自分自身の親が他界した後は、子どもがどこをふるさとと考えているかを気にかけるようになるのかもしれない。それは家族の世代交代と関係するだろう。ふるさとを人の生涯発達の始原と仮定する場合、家族が移住するたびに家族構成員一人ひとりのふるさとは異なると想定できるかもしれない。

また、原調査の対象者三人は、結婚を転機に山中の典型的なふるさとの風景が広がった過疎の集落で暮らしてきた。三人はいずれも現住地と比べて都市的な空間での生活に区切りをつけて、ふるさとの風景そのものの中山間地に移住したが、現在の居住地域をふるさととは思っていない。Eが「田舎だからふるさとではなく、都会でも思い出の場所がふるさとだと思う」と語ったように、ふるさとの心象は、心に思い描いたのどかで四季の美しい風景のなかに、特別な人の存在を認知し形成されると考えられる。そうした重要な人との関係が自己の成長に影響したと認知するとき、現在の自己の基礎をふるさとでの諸経験に帰因し理解しようとするのかもしれない。

自身の生涯を統合するためには、人生の意味について改めて考えてみる必要があるだろう。統合感を確立した人は、過去を実存的な観点から眺めることができ、人生と自身の個性は、個人的な満足と危機を乗り越えてきた諸経験の蓄積から派生した産物であることを認識し、自分史を全体として受容できるだろう（Newman & Newman, 1975）。人生を統合する過程として回顧を考える場合、回顧は自己の発達の経過について内省を促し、記憶の選択と社会的な承認に影響される価値志向が自己概念の連続性をかたちづくる。自己の発達の経過を繰り返し内省し、自己形成に重要な影響を与えた経験を理解する過程をとおして、自己を受容できる態度が達成される。幼少期から学童期にかけてのふるさとの記憶は、自己の形成と発達の主要因として、人生の統合と受容に影響すると考えられる。

引用文献

Baltes, P.B., Reese, H.W., & Nesselroade, J.R. 1977 *Life-span developmental psychology: Introduction to research methods.* Monterey, California: Brooks/Cole.

Baltes, P.B., Reese, H.W., & Lipsitt, L.P. 1980 Life-span developmental psychology. *Annual Review of Psychology,* **31**, 65-110.

Erikson, E.H. 1963 *Childhood and society* (2nd ed.). New York: Norton.（仁科弥生 訳 1977, 1980『幼児期と社会 1, 2』みすず書房）

Erikson, E.H. 1980 *Identity and the life cycle.* New York: Norton.（西平 直・中島由恵 訳 2011『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房）

Newman, B.M., & Newman, P.R. 1975 *Development through life: A psychosocial approach.* Homewood, Illinois: Dorsey.（福富 護・伊藤恭子 訳 1980『新版 生涯発達心理学―エリクソンによる人間の一生とその可能性―』川島書店）

Santrock, J.W. 1985 *Adult development and aging.* Dubuque, Iowa: Wm. C. Brown.（今泉信人・南 博

文　編訳　1992 『成人発達とエイジング』 北大路書房）
武田圭太　1993 『生涯キャリア発達―職業生涯の転機と移行の連鎖―』 日本労働研究機構
武田圭太　2008 『ふるさとの誘因』 学文社
武田圭太　2015 『かかわりを求める女性心理』 ナカニシヤ出版
武田圭太　2016a「ふるさと心理の構造分析（1）」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』, **61**, 45-49.
武田圭太　2016b『“私”を選択する女性心理』 学文社
武田圭太　2017 「ふるさと心理の構造分析（2）」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』, **62**, 55-62.
武田圭太　2018 「女性のふるさと心理（1）」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』, **63**, 1-9.
八木 透　1996 「家・女性・墓―女性たちにとっての故郷―」『日本民俗学』, **206**, 36-65.
安井眞奈美　2000 「女性にとっての「ふるさと」とは―里帰り慣行を手がかりにして」『天理大学学報』, **52**（**1**）, 1-17.